

がん哲学外来（考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目） 病気であつても、病人ではない

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学 教授

樋野 興夫

日本人の2人に1人はがんに罹患し、3人に1人はがんで死亡すると言われるように、がんは誰もがかかりうる疾患である。このような現状を踏まえ、2007年にがん対策基本法が施行され、「がん対策推進基本計画」には、すべてのがん患者・家族の苦痛の軽減・療養生活の質の向上を目標とし、その計画の一つにがん医療に関する相談支援・情報提供が挙げられている。しかし、実際の医療現場は医療の高度化と人手不足

で多忙をきわめ、必然的に患者に病状や治療の説明をするだけで手一杯となり、患者の生き方や人生に関心を持つたとしても、それらについて患者と十分に対話する時間的余裕がないのが現状である。がん患者はがんとともに生きていくうえで、病気を治すことだけでなく、人とのつながりを感じ、尊厳を持って生きることが求めている。

「がん哲学」とは、戦後初代東

京大学総長の南原繁（1889-1974）の政治哲学と、元癌研究会癌研究所長で東京大学教授であった吉田富三（1903-1973）のがん学をドッキングさせたもので、『がん哲学II生物学の法則十人間学の法則』である。「がん哲学外来」は、生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がん細胞の発生と成長に哲学的な意味を見出そうとする病理学者の出会いの場でもある。

「がん哲学外来」は、「ユーモアに溢れ、心優しく、俯瞰的な大局観のある人物」の育成訓練の場でもある。「がん哲学外来」のモットーとして、「暇げな風貌」と「偉大なるお節介」がある。「暇げな風貌」とは、たとえ忙しくても、そのことを表に出さず、「暇げな風貌」をした人が、ゆったりとした雰囲気ですら患者と対話できる資質のことである。「偉大なるお節介」とは、「他人の必要に共感すること」であり、「他の人々に注意を向ける」



樋野 興夫 氏

医学博士

順天堂大学医学部 病理・腫瘍学教授

一般社団法人 がん哲学外来 理事長

癌研究会癌研究所病理部、米国アインシュタイン医科大学肝臓研究センター、米国フォックスチェースがんセンター、癌研究所実験病理部長を経て現職。

日本家族性腫瘍学会理事長、日本癌学会理事、日本肝臓学会の評議員ほか、第99回日本病理学会総会会長を歴任。肝臓および腎臓の研究で、日本癌学会奨励賞、日本実験動物学会賞、癌研究会学術賞、高松宮妃癌研究基金学術賞、「新渡戸・南原基金」第1回「新渡戸・南原賞」、「アスベスト・中皮腫外来」で東京都医師会賞などを受賞。

2008年1～3月順天堂大学医学部附属順天堂医院で「がん哲学外来」を開設、予約が殺到する。その後、都内や横浜で同外来を開設し、各地で好評を得る。

ことである。がん患者の苦悩や気がかりに耳を傾け、共感することで、患者の忘れかけていた自尊心をよみがえらせる。殺伐とした現代に、一歩踏み込んで対話し、人間存在の根幹に触れる「なすべきことをなそうとする愛」で、患者の希望や欲求をすくいあげるこ

とが望まれている。「医師は生涯書生」「医師は社会の優越者ではない」「医業には自己犠牲が伴う」(吉田富三)は、まさに、現代にも生きる「医師の3ヶ条」であろう。

項目は、左に示す表のとおりである。「偉大なるお節介症候群」が日本国に蔓延化すれば、いかに、「悩める人々の慰め」となろう。

えられている。その時、その人らしいものが発動してくるであろう。「希望」は、「明日が世界の終わりでも、私は今日りんごの木を植える」行為を起こさせるものであろう。「電子計算機時代だ、宇宙時代だ」といつても、人間の身体の出来と、その心情の動きとは、昔も今も変わっていないのである。超近代的で合理的といはれる人でも、病気になるって、自分の死を考へさせられる時になると、太古の人間にかへる。その医師に訴

「偉大なるお節介症候群」の診断基準

- (1) 暇げな風貌
- (2) 偉大なるお節介
- (3) 速効性と英断

「偉大なるお節介症候群」の選考項目

- (1) 「役割意識と使命感」
- (2) 「練られた品性と練々たる余裕」
- (3) 「賢明な寛容さ」
- (4) 「実例と実行」
- (5) 世の流行り廃りに一喜一憂せず、あくせくしない態度
- (6) 軽やかに、そして、ものを楽しむ。自らの強みを基盤とする。
- (7) 新しいことにも、自分の知らないことにも謙虚で、常に前に向かって努力する。
- (8) 行いの美しい人 (a person who does handsome)
- (9) 「冗談を実現する胆力」— sense of humorの勤め—
- (10) 「ユーモアに溢れ、心優しく、俯瞰的な大局観のある人物」

へ、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間にかへるのである。その時の救いは、頼りになる良医が側にいてくれることである。(吉田富三：日本の経済、1968年、『がん哲学』110ページ参照)の真实性を、『がん哲学外来』での対話を通して実感する日々である。すべての始まりは「人材」である。行動への意識の根源と原動力を持ち、「はしるべき行程」と「見据える勇氣」、そして世界の動向を見極めつつ、高らかに理念を語る「小国の大人物」出でよ！

医師になり、すぐ、癌研究会癌研究所の病理部に入った。そこで、また大きな出会いに遭遇したのであった。病理学者であり、当時の癌研究所所長であった菅野晴夫先生(がん研究会顧問)は、南原繁が東大総長時代の東大医学部の学生であり、菅野晴夫先生から、南原繁の風貌、人

となりを直接うかがうことができた。

南原繁には、ますます深入りし、さらに、菅野晴夫先生の恩師である日本国の誇る病理学者・吉田富三との出会いにつながった。吉田富三は日本国を代表する癌病理学者であり、菅野晴夫先生の下で、2003年、吉田富三生誕100周年記念事業を行う機会が与えられた。吉田富三の論文、著作を熟読し、これを機に、吉田富三への関心が高まり、深く学んでいくことになった。こうして南原繁との出会いから約40年、さらに、吉田富三との出会いが追加され、必然的に『がん哲学』の提唱へと導かれた。さらに、幼年期の田舎の診療所のイメージが重なり、『陣営の外』『がん哲学外来』へと展開した。人生において、良き出会いがいかに大切であるかである。「人生邂逅の3大法則―良い先生、良い友、良い読書―」は、厳粛な絶対性大原理である。

病理学者の私が、「陣営の外」に出て話し始めたのは、癌研究所時代

の2000年「武士道」発刊100周年シンポジウムで、国連大学で講演の機会を与えられたのがきっかけである。上述のように、若き日に戦前の東大法学部時代の南原繁(後の総長)の教え子である人物に出会い、南原繁の読書に明け暮れ、その読書の習慣を通して、「南原繁の恩師である新渡戸稲造の存在」を知り、新渡戸稲造の読書にも耽った。そのことを通して、新渡戸稲造を尊敬する人物との出会いが始まり、2000年、『武士道』発刊100周年シンポジウムで講演の時が授けられた。「ぶれぬ大局観の獲得」は「不思議な人生の邂逅」の連続によって与えられることの体験的学びであった。まさに「進歩と保守の一致する所、旧と新との融合する所、そこに真醇なるものが生起する」(内村鑑三)の言葉が鮮明によみがえる。

国手とは「国を医する名手」の意、「名医また医師」の敬称と国語

辞書にあり、「医師は直接、間接に、国家の命運を担うと思うべし」とのことである。1860年代遣米使節団が、ニューヨークのブロードウェイを行進した。彼らの行進を見物した詩人ホイットマンは、印象を「考え深げな黙想と真摯な魂と輝く目」と表現している。この風貌こそ、現代に求められる「学者の風貌」ではなからうか。一見「理解不能モード」である複雑な現代社会・混沌の中で、「がん哲学外来」をさりげなく浸透させることが、現代社会に生きる「叡智」として身にしみる今日この頃である。「がん哲学外来」は、「がん哲学とがん教育」でもあり、「がん教育をどう進めたらよいか」小・中・高校でのがん教育の取り組み」についても、大いなる示唆を与えられるものと考ええる。「病気であっても、病人ではない」は、医療の真髄であり、「がん哲学外来」の指針は、「品性をもって、軽やかに、大胆に」であろう。